教科等研究会（中学校英語部会）

平成２８年度　研究活動のまとめ

１　研究テーマ

イメージ化を図り、確実な定着を育む英語指導の工夫
～視聴覚資料や学習シートの効果的な活用～

２　研究経過

第１回	第２回	第３回	第４回
期日　５月２６日(木) 人数　２１人 場所　甲佐中学校	期日　８月９日(火) 場所　甲佐中学校 内容　研修会	期日　１０月２６日(水) 場所　蘇陽中学校 授業者　桂めぐみ教諭	期日　１月２７日(金) 場所　木山中学校 内容　実践報告会

３　研究の概要

(1) 研究の内容

今年度、中学校英語部会全体の研究テーマを昨年度に引き続き「イメージ化を図り、確実な定着を育む英語指導の工夫」、サブテーマを「視聴覚資料や学習シートの効果的な活用」と設定して、第３学年での研究授業と授業研究会を行った。

英語部会では、小学校の外国語活動から中学校の英語科教育への接続をスムーズに行うため、生徒が「音声→イメージ（化）→文字」で英語に触れ、ICT機器や視聴覚教材等を用いて、音声のイメージ化を図り、口頭による反復練習を通して言えるようになった英語表現を確実に書けるようにしていくことを目指している。映像や実物、絵などのイメージから基本文やキーセンテンスが導入される指導法から、書く活動へとスムーズに進んでいき、更に基礎・基本の定着を図り、また活用できることでさらに定着を図ることを大きな目標として取り組んでいる。

英語部会の組織は、例年通り、教科担任をしている学年を考慮して、会員２３名を第１学年部会、第２学年部会、第３学年部会の３つの部会に分けた。各学年部の運営は、各学年部の部長、副部長を中心に行った。昨年度までの取り組みで、「視聴覚資料や学習シートの効果的な活用」がどの学校でも行えることを目指して、新出文型を用いた学習シートや、基礎・基本の定着のために繰り返し使える学習シートとデータを全会員で共有することができた。昨年度からその学習シートを使い、また視聴覚資料の工夫改善を行い、より効果的な授業づくりについて研究した。

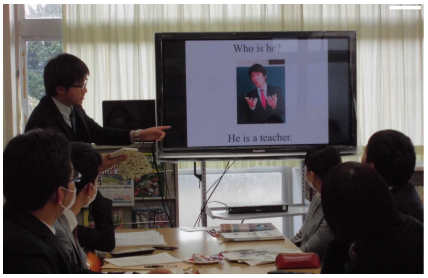
(2) 成果と課題

成果としては以下の３点が挙げられる。

① 平成２７年度から、英語中核教員研修が行われている。中央研修を受けたリーダー教員の復講を通して、多様なスキルや方法を学ぶよい機会となっている。今年度は、研修に参加した先生から会員全員への復講の時間を設け、資料や研修の内容についていくつかピックアップしたものを紹介し、実際にワークショップなどを取り入れ、教員自身が生徒の立場になって活動を体験することにより、今後の授業に活用できる学びの場となった。

② 今年度は３年部会での研究授業を行った。３年生になった時に、どのような力を身につけさせておきたいか等の見通しが持てる授業であった。日常的にICTの活用がなされており、写真や絵から文を導入し、生徒にイメージを持たせた後文字を導入しパターンプラクティスなどを行い、定着を図る授業実践がなされていた。

③ 今年度は実践報告会を行った。各学年部に分かれ、一人一人持ち寄った学習シートや授業の様子や作成した映像（DVD等）、タブレットを使ってのデモンストレーションなど、多様な実践報告がなされた。実際に会員が疑似体験することができ、今後の授業で取り入れやすいアイディアなどを共有することができた。ICT機器の活用、ALTの協力（国際交流）などで生徒に活動することの強い動機付けを与えることを実感することもできた。



課題としては以下の３点が挙げられる。

① なぜその活動をするのか、生徒が自ら「やってみたい！」と思うことのできる、強い動機付けがあるテーマや課題の設定をどのようにするのか、今後検討していく必要がある。文構造によっては生徒にとって非常に強い動機付けを与えやすいものと、設定が難しい場合とがある。

② 英語教育の小中連携について取り組んでいる地域・学校はまだ少なく、その重要性は分かっているものの、どのように進めていけばよいのか、十分に検討できていない。特に今年は熊本地震の影響で、例年行っている小中合同の夏季研修を行うことができなかった。

③ 県学力調査の結果等からも、「知識・理解」がある程度定着しているにもかかわらず、「活用」の定着率は低い。どの学校においても意識して授業の中でも取り組んでいるいるが、実際に書く（表現する）力に課題が大きい。やはり、「話すこと・話す力」から「書くこと・書く力」をどのように定着させていくか、どのような指導法や学習シートが有効的であるか検討して行かねばならない。

４ 実践事例

(1) 授業の概要

研究授業は、蘇陽中学校にて桂教諭による３年生一斉クラスでの授業が行われた。ウォーミングアップでは、不規則動詞の口頭練習を対ALTやペア活動で何度も反復練習を行い定着を図った。授業では多くのClassroom English が使われており、また授業者とALTの息のあったテンポの良い流れで、スムーズな活動になっていた。帯活動の徹底や、活動のパターン化など日ごろからの訓練がよくできていることを感じさせる活動で、生徒が主体的に活動に取り組む姿が印象的であった。教室の黒板上部には壁取付型プロジェクターがあり、いつでも容易にプロジェクターを使用して、視聴覚教材を用いて生徒が学ぶことのできる環境が整っていた。また、前時に学習した現在分詞の後置修飾についての復習が行われ、本時の展開につながるものであった。生徒の笑顔や活気が見られ、英語への意欲が感じられた。

展開では、本時のめあて「過去分詞の後置修飾を用い、日本のものについて英語でクイズを作ることができる。」を確認し、基本文の文構造を導入した。聞く・話すことを中心とし、ICT機器等の活用や文の特長を視覚的にとらえることができるような視覚教材が準備され、生徒の関心・意欲を喚起する導入の工夫が行われた。リズムよくパターンプラクティスで反復練習を行った。本時の中心活動につながる工夫がなされ、次のアクティビティに自然と入ることができていた。　授業研究会では、基本文の導入時には文字の提示はできるだけ最後に回し、耳や目から視聴覚資料とともにたくさんの例文に触れさせ、口頭で何度も反復練習させることが大事ではないかという意見が出された。また、アクティビティの中で、生徒が辞書を用いて英作文に取り組むことがあったが、毎時間使っているのか、どんな時に使うのが有効的なのかなどの意見が出された。桂教諭の自評によると、「授業ではグループワークよりもペアワークを多く取り入れ、反復練習を照ってしたり、ペアでスキット作成をしたりする時間を多く確保しているということであった。今回はグループでクイズ作りに取り組み、自力では全く書くことができない生徒が数名いたが、教師や友だちの支援により作業に取り組むことができていた」ということだった。

研究授業の生徒の姿を通して、発表をいかに積極的に自

信を持って行わせるのかが課題としてある。今回の研究会においても、発表前には個人の練習時間をしっかり確保し、ペアやグループなどの小集団で一度発表を体験させた後、全体の前で発表するという手順をとり、個々に自信を持たせて言わせることの大切さを再確認できた。永瀬校長からは「生徒の発表をビデオに撮り、それを見て振り返りや改善点について生徒に確認させたり、後輩に見せることで意欲の喚起につなげるとよいのではないか」という助言をいただいた。今後は発表したことが次の活動に生かされ、また生徒の発表意欲をどのようにして引き出していくのかを教師自身が振り返ることが必要である。指導と評価の一体化についても、本当にできているのかどうか、会員一人一人が点検や工夫改善を行っていかなければならない。

（2）学習指導案

第３学年１組　英語科学習指導案

日　時　　平成２８年１０月２６日（水）　第５校時
場　所　　蘇陽中学校　３年１組教室
指導者　　教諭　桂　めぐみ
　　ALT　Christian Steger

1　単元名　Program6　Let’s Talk about Japanese Things.　（ SUNSHINE ENGLISH COURSE3　開隆堂 ）

2　単元について

（1）　単元観

本単元は、マイクが美術の授業で興味を持った「鳥獣戯画」についてインターネットで調べ、日本の漫画の原点と言われていることを知って、それを報告する。さらに由紀が日本の伝統的なおもちゃであるけん玉を紹介し、それをヨーヨーと比較しながら報告する。最後に武史が由紀を誘って、マイクを町内のお祭りに案内する内容である。英語を通して、日本の文化に触れることができる題材である。

また、本単元は、学習指導要領において、「内容の取扱い」中に規定されている「外国や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと」の点を踏まえた単元であり、日本の文化を英語で表現することをねらいとしている。生徒にとって、自国の文化の知識はあるものの、英語で発信することは難しい。また、相手の文化に、日本の文化に対応する概念がない場合は説明を加えることになる。日本文化を、相手にどのように表現すれば的確に理解してもらえるかを意識し、自国の文化について発信というところに、生徒の興味・関心を向けることのできる単元である。主な言語材料は、セクション１では現在分詞の後置修飾、セクション２では過去分詞の後置修飾を取り扱う。

（2）　指導上の留意点

本校の研究テーマは『確かな学力の育成を目指した授業改善と学習習慣づくり―　教科の特質を生かした「まとめ」と「振り返り」の研究　―』である。授業では、生徒が授業の中でどのようなことができるようになればよいか見通しを持たせるため、「めあて」（Today’s goal）を明示している。「めあて」は、言語使用場面を踏まえ、「英語を用いて何ができるようになるのか」を明確にしたものになるように設定している。また、「めあて」と整合性がとれるように「ポイント」（Today’s point）を示したり、学習の流れに沿ったワークシートや自己評価シートを活用したりして授業終盤で「まとめ」と「振り返り」がスムーズに行えるように工夫をしている。また、単元の最後にはアクティブ・ラーニングの要素を取り入れ、生徒にとって身近な話題や興味・関心のあるテーマを与え、英作文やスピーチ活動に取り組ませている。

上益城郡中学校英語部会研究テーマ「イメージ化を図り、確実な定着を育む英語指導の工夫～視聴覚教材や学習シートの効果的な活用～」と関連した取り組みとして、毎時間の授業で、文の特徴を視覚的にとらえたり本文の内容をイメージしたりしやすいように、絵や写真、デジタル教科書等のICT機器を活用している。生徒の興味・関心を喚起しながら、本時の内容理解や学習内容の確実な定着を目指した授業を行う。

3　単元の目標

（1）　間違うことを恐れず、自分の紹介したいことや伝えたいことを積極的に書いたり発表したりできる。
（2）　後置修飾の文を用い、英語で人について詳しく説明したり日本のものについて紹介したりすることができる。
（3）　日本のものについての紹介文を読み、その内容を理解することができる。
（4）　現在分詞の後置修飾、過去分詞の後置修飾の文構造を理解することができる。

4　本時の学習

（1）本時の目標　過去分詞の後置修飾を用い、日本のものについて英語でクイズを作ることができる。

（2）本時の展開

過程	学習活動・予想される生徒の反応	形態	指導上の留意点・評価		備考
			T１（JTE）	T２（ALT）	
つかむ 5分	1　Greeting 2　Irregular verbs （1）ALT と練習する。 （2）ペアで練習する。	一斉 ペア	・元気よくあいさつを行い、英語学習の雰囲気を作る。 ・day, date, weather を確認する。 ・生徒とともに既習事項の確認を行う。 ・ペアを作らせる。 徹底指導（ポイント） ・既習事項を身につけさせるために、繰り返し練習を行う。		・ファイル ・タイマー
ふかめる 40分	3　Grasp today’s goal （1）JTE と ALT のクイズを聞いて、答えや英文の内容を推測する。 ・クイズの答えは「豆腐」だ。 ・過去分詞を使っている。 ・「～された」って意味かな。 （2）過去分詞の後置修飾の文構造を知る。 4　Pattern practice ・過去分詞の後置修飾の文を練習する。 5　Activity （1）個人で、自分の持っている絵カードについてクイズを考える。 （2）個人で考えた英文をグループで共有しクイズが出題できるように考える。 （3）全体でクイズを出題する。	一斉 一斉 個人 一斉 ペア 個人 班	・クイズ形式で文を紹介し、生徒の興味を引き付ける。 ・This is a food made from soybeans. This is a soft food What’s this? ・ノート、ワークシートにポイントを記入させる。 ・既習事項や例文を押さえる。 ・写真、絵のものについて英語で説明ができるように練習させる。 ・日本のものについてクイズが作成できるように絵カードを用意する。 ・つまずいている生徒には支援をする。 ・作成したクイズをチェックする。 ・クイズの出題の仕方等、発表のアドバイスをする。	・JTE と交互にクイズを出題する。 ・This is a comic book read by many people. This is a book written by Akira Toriyama. It’s a story about Son Goku. ・写真や英文を見せながら例を示す。 ・発音を指導したり、声かけを行ったりする。 能動型学習（ポイント） ・過去分詞の後置修飾や既習事項を用い、日本のものについてクイズに使える英文を書かせる。 ・生徒のクイズに質問をしたり、いいところ等をほめたりする。	・電子黒板 ・ノート ・ワークシート ・タイマー ・ワークシート ・絵カード
まとめる 5分	6　Consolidation （1）本時の授業を振り返る。 （2）自己評価カードを記入する。 （3）次回の授業について予告を聞く。	一斉 個人	・本時のまとめを行い、次時の授業につなげる。	・元気よくあいさつをする。	・自己評価シート

（3）評価

【評価規準】 【外国語表現の能力】 過去分詞の後置修飾を用い、日本のものについてクイズを作成することができる。	【評価基準A】	日本のものについて、過去分詞の後置修飾の表現を用い、文の順序を考えたり、ヒントとなる情報を加えたりしながら、まとまりのある英文でクイズを作成することができる。
	【評価基準B】	日本のものについて、過去分詞の後置修飾の表現を用い、３文程度の英文でクイズを作成することができる。
	Bに達しない生徒への手立て	ヒントのついたワークシートを使用させたり、机間指導の中で個別に支援したりする。